



ポット苗植栽前



3年経過したポット苗植栽地 植物が繁茂し、森林植生が復元されつつある。



5年経過したポット苗植栽地

(写真提供：鈴木邦雄氏)

●どんぐりのポット苗を植える

植栽する苗木を種子から育てると、根付く率が高く、早く成長します。秋にカシヤシイの実をビニールポットに播くと、翌年3~4月に発芽します。適度の水やりと雑草の抜き取り程度で、2~3年後には樹高1.3m程度の苗に成長します。3~5月にポットから苗木を外して移植します。様々な樹種のポット苗を1㎡当たり3本の高い密度で植えると、自然の森のように競争・共存し、経費も手間も省くことができます。



ポット苗を植栽する場合、コンクリート破片などのガラや木の枝を底部に入れ、覆土し、その上に黒土をかぶせる。植栽後の地表面はわらなどで覆う。



ドイツでの表土の保全例 ドイツでは表土保全の概念が法的に明記されており、地表土は工事に先立ち他の場所で保護し、工事完了後、元の場所に戻さなくてはならない。また、移動先での表土の保護方法についても、法的に基準が設けられている。

●表土の役割

土壌のなかでも特に地表近くの表土が1cmできるには、100~数百年かかるといわれています。この表土は、植物を育て、水や汚染物質を浄化・吸着し、養分や水分、空気(酸素)を保つ働きもっています。そして、多くの生きものを育み、生態系を根底から支える役割も果たしています。

雨や風による表土の流出を避けるために植栽を行うことや、生ゴミや落ち葉をコンポスト(堆肥)にして土をつくり出すこと、一度掘り起こした表土を別の地域に移動させずに、同じ場所や近くの地域に埋め戻すことといった表土の保全は、地域の生態系の保全にもつながります。



緑化植生護岸 水際のコンクリート護岸に表土を移植して植生を復元している。土中には植物の種子が含まれているため、植栽しなくても自然に植生が再生してくる。

●表土を移植して地域の植生を復元する

表土のなかには、発芽せず生存し続けている植物の休眠種子があります。表土を植物の生育適地にそっくり移植すると、これらの種子が温度や光などの環境刺激を受けて発芽します。この方法は、当該地域に本来自然に成立する植生を潜在的な自然回復力をいかしつつ復元することができるという利点もっています。

河川敷から移植した表土からタコノアシやミソコウジュといった貴重な植物が発芽する例もあり、植生の有力な復元手法として注目されています。